

指標名：景気動向指数（2009年12月）

発表日：2010年2月5日（金）

～C I一致指数は9ヶ月連続で上昇。基調判断は「改善」を維持～

第一生命経済研究所 経済調査部
担当 主任エコノミスト 新家 義貴
TEL:03-5221-4528

○ C I一致指数は9ヶ月連続で上昇。C I先行指数も大幅に上昇

内閣府から公表された09年12月の景気動向指数では、C I一致指数は前月差+1.6ポイントとなり、9ヶ月連続で上昇した。輸出の増加等を背景としてC I一致指数は09年3月をボトムとして上昇しており、景気回復が持続していることが示された。内訳では、大口電力使用量のみマイナスに寄与したが、その他の系列はすべてプラスに寄与した。また、C I先行指数も前月差+3.0ポイントと、10ヶ月連続で上昇した。D Iについては、一致D Iが100%、先行D Iが80.0%となった。一致D Iは3ヶ月連続の100%である。

内閣府によるC I一致指数の基調判断は、「改善を示している」が維持された。内閣府の定義によれば、「改善」とは「景気拡張の可能性が高いことを示す」とされている。一致C Iからも、景気回復局面の継続が確認された。

景気の山谷の判定はヒストリカルD Iを用いて行うため、C Iの基調判断と景気局面が直接対応するわけではないが、過去の景気の山谷とC Iの山谷はかなり連動している。実際にヒストリカルD Iを計算すると、景気の谷は09年3月となり、一致C Iのボトムの時期と一致する。最終的な認定はまだ先のことになるが、事後的に見て09年3月が景気の谷だったと判定されることになるだろう。

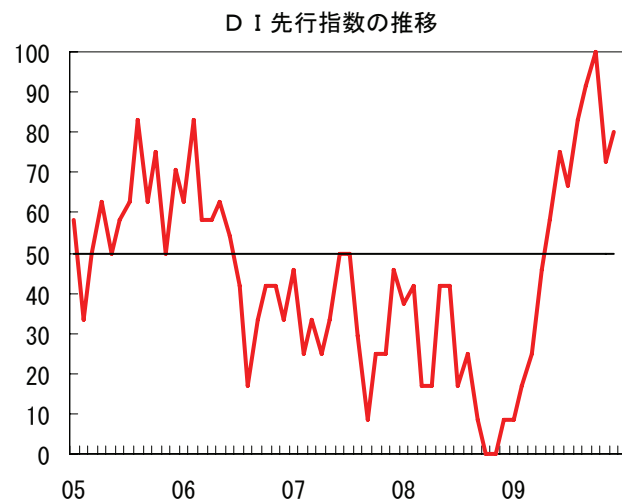
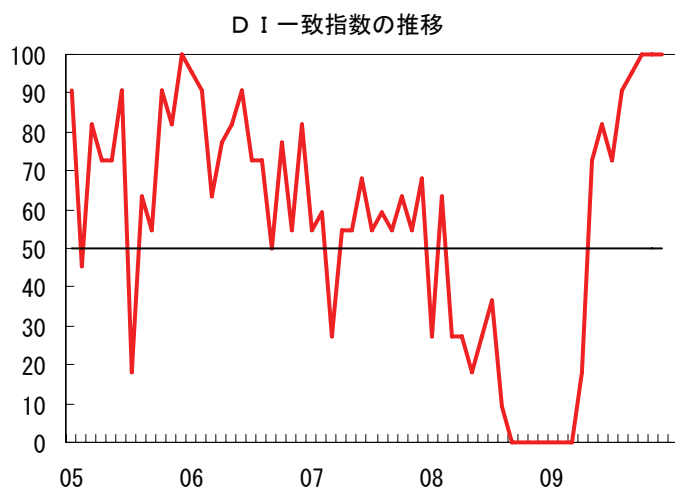
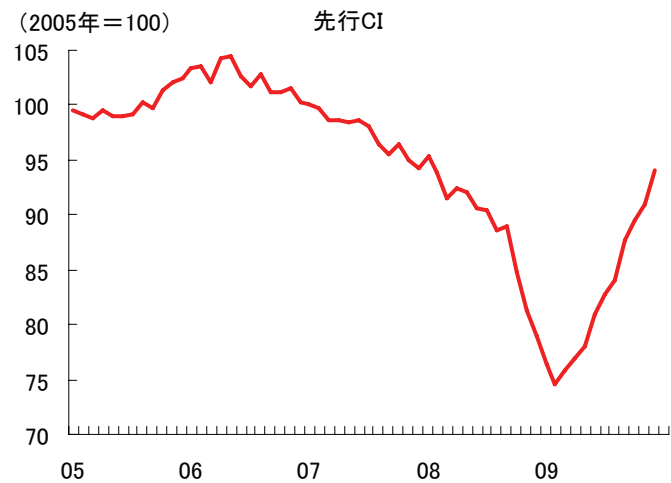
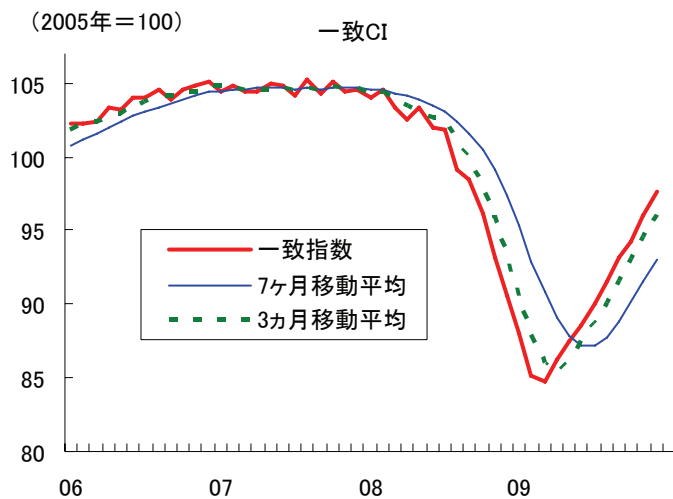
○ 10年春には先行C Iの改善ペース鈍化が予想されるが、過度の懸念は不要

C Iは、一致指数については11指標、先行指数については12指標を合成して作成されている。そのうち一致C Iでは「小売業販売額」、「卸売業販売額」の2系列、先行C Iでは「耐久消費財出荷指数」、「日経商品指数」、「東証株価指数」の3系列は、前年比の値が対象になっている。このことがC Iに歪みをもたらしていることに注意が必要である。

08年9月のリーマンショック後に景気が急激に落ち込んだ影響で、多くの経済指標が極端に下振れたため、09年の10～12月以降については、表面上、多くの指標が前年比でみれば大幅に上振れやすくなる。結果的に、足元では実際の経済情勢の改善度合い以上にC Iが改善するという状況が生じている。C Iの作成においては、過度の変動については刈り込みを行うという処理がなされているため、こうした歪みはある程度軽減される。しかし、特に先行C Iについては、刈り込みの基準が一致C Iに比べて緩いため、指数への影響が残る可能性が高いだろう。

もっとも、リーマンショック後の急激な落ち込みが09年春頃に落ち着きを見せたことを考えると、こうした上振れは次第に解消されてくる可能性が高いだろう。構成指標の前年比での上振れという特殊要因が一巡するにしたがって、先行C Iの改善ペースは通常の状態に戻ると思われる。

今後、こうした改善ペースの鈍化を、「景気減速の兆候」と受け取る向きが増える可能性があることに注意が必要だろう。だがこれは、これまで実態以上のペースで改善していたものが元に戻るだけである。在庫率の悪化などが生じてくれば話は別だが、あくまで特殊要因の剥落を原因とする改善ペースの鈍化ということであれば、特に懸念する必要はないだろう。



(出所) 内閣府「景気動向指数」